

かつしか郷土かるたの遊び方 ～競技大会用ルール～

平成30年3月29日
かつしか郷土かるた普及・活用委員会

1 競技を始める前に

この「かつしか郷土かるた」は、子どもから大人まで世代を超えて、いつまでもふるさと葛飾に誇りを持ち、愛し続けて欲しいとの願いから生まれました。このかるたで遊ぶときは、勝敗ばかりにこだわるのではなく、葛飾の自然や文化、歴史をよく知り、ルールを守って、礼儀正しく、仲良く楽しく遊びましょう。

2 競技のやり方

(1) 団体競技

3人が1組になり、2組で勝負します。

(2) 個人競技

1人对1人で勝負します。

3 競技に必要な係

(1) 進行係

進行係は、その大会の運営をよく把握し、競技がスムーズに行われるように努めます。

人員の配置は、主たる者1人と副として数名を必要とします。(会場の規模により、人数を調整します。) 少人数の場合は、読み手が兼ねることもできます。

(2) 読み手

会場に1人配置します。読み手は、競技者が取り札を取るとき、はっきりとした声で読み上げないと、トラブルを招く恐れがありますので注意しましょう。

(3) 審判員

各コートに1人ずつ配置します。審判員は、試合を公平に判定し判断するように努めます。1試合が終了したら、その結果を記録表に記入し、競技者に確認してから記録係に提出します。

なお、競技を行う上での問題点、その他進行を妨げるような事態が発生したときは、速やかに挙手し、進行係に告げます。

(4) 記録係

記録係は、審判員から預かった記録表を再度精査した後、ただちに対戦結果表に正しく転記します。

4 競技の準備

(1) コートの広さ

コートの広さは、団体競技の場合、個人競技の場合によって異なり、下記のとおり設定します。なお、参加チーム数および会場の広さに合わせて、適宜変更することもあります。

団体競技の場合

1組(3人)対1組(3人)で向かい合って座ります。相手との間は90cm、各陣の幅は120cm以内とします。向かい合った真ん中に幅3cm程度の「中央線」を引いて、それを挟んで自分の向きにかるたを並べます。【図1】

個人競技の場合

1 人対 1 人で向かい合って座ります。相手との間は 90 cm、陣の幅は 70 cm 以内とします。向かい合った真ん中に幅 3 cm 程度の「中央線」を引いて、それを挟んで自分の向きにかかるたを並べます。【図 2】

(2) 競技者の姿勢

- ① 左右のひざを「仕切り線」に対し常に平行を保ち、「仕切り線」から、手、ひじ、ひざ、肩等が越えないようにします。
- ② お尻を多少上げたり、ひざとひざの間隔を多少あけたりしても構いませんが、前傾姿勢は 45 度以上を保ち、足のつま先で立たないようにします。
- ③ 並べた札の上には頭がかぶさらないようにします。

5 競技の進行方法

(1) 始める前に

- ① 競技に使用する札の枚数は、「団体戦」「個人戦」とともに 44 枚とします。
- ② 審判員は場の中央に裏返しのまま札をよく切り置きます。
- ③ 対戦チームは所定の位置に座り、姿勢を正して互いに礼をします。

(2) 取り札の並べ方

- ① 進行係の合図でジャンケンをし（団体競技の場合は代表者同士で）、勝った側が札を裏返しのままよく切って 22 枚ずつに分け、ふたつの山にし、場の中央に置きます。ジャンケンに負けた側が先にどちらか一方の山を取り、勝った側が残りの山を取ります。この時、枚数がお互い 22 枚ずつになっているか確認します。もし、22 枚ずつではなかった場合は多かったチームが札を裏側のまま広げて相手チームに札を選んでもらうようにしてください。
- ② 進行係の合図で札を表にして並べます。

団体競技の場合は、両陣 3 人がそれぞれ「札群」を分担して（中央が 8 枚、左右が各 7 枚）、自陣のコートに 2 段になるよう並べます。このとき、各段が 11 枚になるように並べます。なお、「札群」と「札群」との間隔は 5 cm 以上にします。【図 1 参照】

個人競技の場合は、自陣のコートに 3 段になるよう並べます。各段には 7 枚ずつ並べ、残りの 1 枚は左右各段好きな場所に配置して構いません。【図 2 参照】

- ③ 札と札との間隔は、左右・上下とも 1 cm 程度離します。相手チームとの札の間隔は「中央線」から 1.5 cm 程度とします。（つまり、「中央線」は 3 cm 程度の幅となります。）

(3) 競技の方法

- ① かるたを並べ始めてから 3 分間を記憶時間とします。（記憶時間は適宜変更可。）競技者はこの間に札の位置を記憶します。記憶時間残り 1 分までは札の置き換えが可能です。
- ② 読み手は、はじめに「空札」を 2 回読みます。空札には、「区歌うたう 光と希望 力あり」の札を用います。これが予告となり、次に読まれる札から取り始めます。（この「く」の札も競技の途中で必ず読まれます。）

また、この「く」の札は最後の 2 枚に残さないようにします。

- ③ 上記の空札（「く」の札）が 2 回読まれた後、1 枚目の札がまず 1 回読まれます（これを「本読み」と言います）。全てのコートで札が取られたことを確認したら、もう 1 回 1 枚目の札が読まれます（これを「空読み」と言います）。本読みと空読みの間隔は 4～5 秒程度取り、競技の状況によって、長さは適宜加減します。1 枚目の空読みの後、2 枚目の札の本読みが行われます。空読みと本読みの間隔は、約 1 秒程度とします。この方法で、3 枚目、4 枚目…と札が読まれていきます。

なお、なんらかの理由で競技がストップした場合は、直前に取られた札を1回空読みし、それを予告とし、競技を再スタートさせます。

原則、空読みが始まりましたら、競技者は動きを静止させなくてはなりません。

- ④ 本読みが始まり、読まれた札が取られるまでに、選手の誰かが、読まれた札以外の札に手を触れたら「お手つき」となります。「お手つき」したら、すでにとった札の中から1枚を相手に速やかに渡します。(この時、「く」の札や「役札」を渡さないようにしましょう。)
団体競技の場合、チーム内の2人以上が「お手つき」しても、相手に渡す札は1枚です。ただし、両方のチームが「お手つき」した場合は、札を渡さなくても構いません。

札を持っていない場合は、「借り」とします。(あらたに札を取ったら相手に渡します。あらたにとった札が「く」の札や役札の場合は、再度「借り」にすることができます。)

- ⑤ 札が最後の2枚になったら、進行係はタイムをかけます。どちらの陣の札が残っても、場の「中央線」上に30cmの間隔を空け、自陣から見て右側の札を自陣側に向けて、並べ直します。団体競技の場合は各組代表者1人を決めて、陣の真ん中に座ります。競技態勢が整ったら、進行係はタイムを解除します。

読み手は直前に読んだ札を1回空読みします。それが予告となり、次に読む本読みで、競技者は札を取ります。その札を取った者が、残りの札を取ることができます。

もし、お手つきをした場合、場にある2枚の札はお手つきをしなかったチームに渡し、加えて、お手つきをしたチームからペナルティとして1枚がお手つきをしなかったチームに渡ります。

(4) 採点方法

- ① 札は、1枚を1点として数えます。
② 同点の場合は、「く」の札を持っている側が勝ちとなります。
③ 団体競技の場合は次の「役札」があります。個人競技の場合はありません。
なお、「役札」がすべてそろわない場合は1枚1点で数えます。

・川札	「い」「ろ」「つ」「な」「あ」	5枚そろくと10点加点
・園札	「ほ」「む」「す」	3枚そろくと5点加点
・人物札	「よ」「そ」「や」	3枚そろくと5点加点

6 競技上の注意事項

(1) 注意事項

- ① 札に早く手が触れた方がその札を取ることができます。
② 札を取るときは、押さえても、はじいても、押しても、引いても、飛ばしてもよいですが、試合の進行の妨げになるような取り方はしてはいけません。
③ 競技中は札の位置を変えてはいけません。
④ 競技中に札が動いた場合は、速やかに元の位置に戻します。戻す際は、お互いに声をかけ、きちんと元の位置に戻ったか確認しましょう。
⑤ 札が読まれるまでは、「仕切り線」から手、ひじ、ひざ、肩等を出してはいけません。
⑥ 札を取る際は、両手を使ったり、札にかぶさったりしてはいけません。
⑦ 札に複数の手が重なった場合は、一番下に手を置いた者が取ることができます。
⑧ 手が同時の場合は、読まれた札のある陣の側が取ることができます。
⑨ 爪が長いと対戦相手を傷つけてしまう恐れがあるため短く清潔に保ちましょう。
⑩ 対戦相手を威嚇したり、進行を妨げるような行為をすることや審判員の指示に従わない場合は、失格や不戦敗などのペナルティを課することがあります。

(1) 審判員の心得

(2) 組み合わせ

(3) 競技中の留意事項

- (4) 試合続行不可能

（５）審判預かり

また、最後の2枚で同時におてつきした場合は、2枚とも審判預かりとします。

120 cm

※札と札との間隔は、前後左右1 cm程度

90 cm

11枚

11枚

11枚

11枚

※札群の間隔は5 cm以上

札群

中央線(3 cm程度)

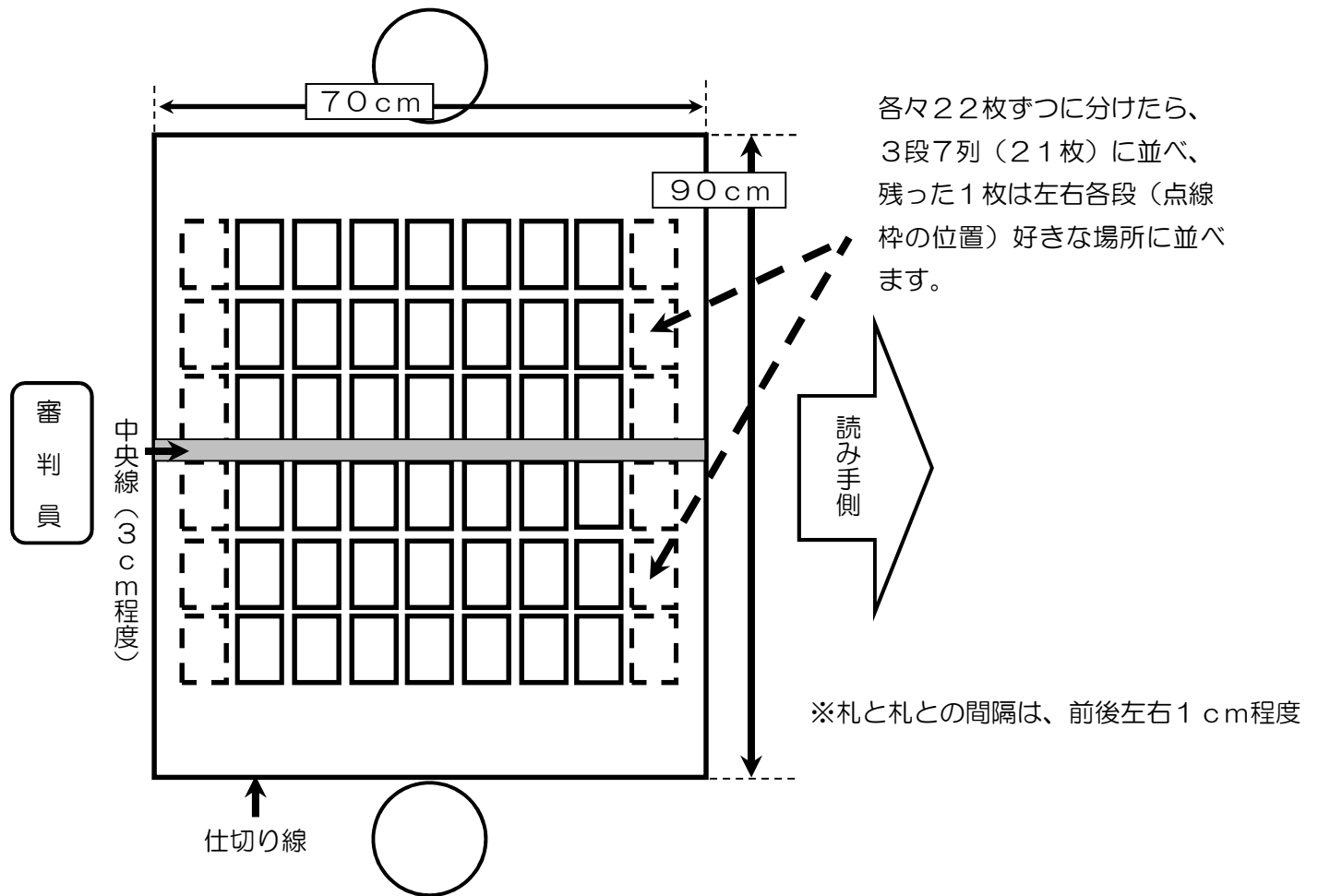
仕切り線

審判員

読み手側

4

【図2】個人戦コート及び札・札群の配置図



改正履歴

教育委員会事務局生涯学習課
令和7年11月21日 改正